

曲 目 解 説

花火の似合う暑い夏。またしても狂気乱舞の西高OBオケへ、ようこそおいで下さいました。本年もまた一曲目は、我がOBオケが誇るスタンダードナンバー「フィンランディア」1992年は、フィンランド独立70周年という事で、二年連続の演奏となります。合っているんですよ、これが。フィン人は、我々日本人と同じウラル・アルタイ語族で、従って今はほとんど白人みtainな顔をしています。元来黄色人種です。そういう所が音楽の上でも共通点としてあるのでしょうか。その民謡を基調としたこの曲も、何となく我が日本人好みの分かりやすい曲になっています。



2曲目は、これまたOBオケ得意とする所の「運命」であります。第四回に続き二回目の演奏となります。この曲目選定については若干もめたのですが、今年は今迄のような大上段にふりかぶった運曲はお休みして、やりやすい曲をという事でこうなりました。然し、どこがやりやすいのでしょうか？誰でも知っている冒頭の運命動機。この八分音符を合わせる事は、実に至難の技でして、ここで予めお断わりしておきますが、本来の四つの音ではなく、五つ又は六つになって聞こえても、どうかご勘弁下さい。ただ、音楽としては実に分かりやすい。荘重にして激烈、絶望的で且つ力強く、その構成美は、彼の九つの交響曲の中でも白眉と思われれます。

続く第二楽章は、夢見る変イ長調。束の間のやすらぎか、はたまた一場の悪夢か。私、三十を越えてから、確かに「楽しくない長調」というものが存在する事を理解出来るようになりました。静かに歌うチェロと、激しく高鳴るトランペットに注目。

そして、第三楽章は憂うつなスケルツォ。スケルツォとは、普通「楽しい」ニュアンスを含みますが、これにはそれが全くなく、続くホルンも、荘重でこそあれ決して楽しくはありません。然しトリオは、これ以上ないほどのドミソの音楽。次に来る四楽章を予感させます。ピチカートで再現されたスケルツォは暗く静かに続き、ティンパニのきざみから弦楽器が次第に高まり、そのまま歓喜の四楽章へとなだれこみます。その第四楽章は、これでもかこれでもかという長調の和音の連続。しつこいほどドミソが続きます。これをしてどの解説も、「苦悩を通しての歓喜」といい、この第五と第九の共通点であると規定しています。確かにその通りですが、私最近秘かに考察するに、それほど我が愛するルードヴィッヒ君が、見事な苦悩の昇華をこの音楽に具現しているとは思えません。むしろその執ようなまでのハ長調の連続に、狂的な無気味なものを感じます。また、そこがすこぶる人間的で愛すべきであるのかもしれませんが。彼の耳がもし聴こえたら、こんな曲は出来なかったでしょうし、そうすると今日の演奏会もモーツァルトの何かをやっていたでしょうか。ともあれ彼ルードヴィッヒの不幸は、我々には幸運でした。彼の耳に、神の祝福があらんことを。アーメン。